

バイ族の住居における食事炊事生活とその展開

○ 日本女大家政 沖田富美子

大阪工大建築 塩谷寿翁

目的・方法：中国雲南省の少数民族の住居採取¹⁾をもとにして、伝統的にたもたれ継承されてきた地床での生活を基調にするバイ族の食事炊事生活のしくみとその展開をさぐる。

筆者は、これを現代文明化のもとですすむ住生活のおこなわれかたの共通化と民族できわだつ個別化のすすみかたを通文化的に比較する研究の一部と位置づけている。

結果：バイ族の住居では、近年に家族生活行為および接客生活行為が場的に分化移行している。あらたな行為の場の領域が形成されつつあるのである。それはウチ向きの行為とソト向きの行為とが場的にわけられるものである。また食事の場の変位はかなりの程度にすすんでいる。これらは家族我の発生におうじた家族と社会（村落共同体）との関係の変化が形態としてあらわれたものである。食事の場は堂屋にとどまるものと厨房にうつるものとが並存しているのだが、共時的にみれば、前者から後者へと展開する傾向は推測できる。

この採取では、炊事とそれにつらなる家畜の世話・信仰などの行為（採取の時期はバイ族の7月祭祖節にかさなっている）をビデオによる映像資料として記録している²⁾。バイ族の炊事につらなる行為は、厨房にすえられた竈を中心におこなわれている。それらは、行為にともなう身体動作のしかた・行為の場・もちいる用具などから、身体を低くする身体動作のしかたが継承され基調としてたもたれる行為の系統である。この採取は、雲南省の少数民族の住居のいっぽうの典型となる地床式の住居における炊事の過程の記録としては貴重なものである。つづいてこれとは対照的な高床式の住居での採取と比較する。

1) 1993年8月31日から9月27日に、中国雲南省大理バイ族自治州喜州鎮仁里邑村（人口4,190人、うち4,178人はバイ族。家族数895戸、1993年7月2日現在、仁里邑村公所資料）および西双版纳ダイ族自治州景洪県曼竜代村（人口319人、家族数63戸、村長からの聞き取りによる）でおこなった住居の採取（いずれも農村部の住居）。2) 対象にえらんだ住居のうちおもに昼食の準備を7例採取。